

## 賢治と『赤い鳥』

井上寿彦

1

賢治が執筆した童話のうち最も早いものとされるのが一九一八（大正七）年八月の「蜘蛛となめくぢと狸」と「双子の星」で、いずれも弟宮沢清六の回想に拠っている。これに加えて「貝の火」もこの年の夏成立したとする見方が強い。

賢治の文学活動が短歌に始まったことはよく知られており、辞世も短歌であるが、その短歌をまとめた歌稿「A」（トシ筆写歌稿）の末尾は、「大正七年五月以降」の次に「八年八月以降」がきて締めくくられる。一方賢治自身が筆写した自筆歌稿「B」の末尾は「大正八年八月より」に続いて、父に同行した関西旅行の「大正十年四月」の歌群がきているが、大正十年の歌群が、誘われた旅の偶詠であったとすれば、賢治における主たる短歌の時代は、両歌稿の共通の末尾、大正八年くらいまでだと言える。

先にもべたように童話の創作は大正七年であるから、この大正七年頃には、賢治の創作意欲が短歌から童話に移っていく時期と言っているはずなのだが、ほとんどの年譜は童話が量産されるのは、大正十年の賢治の突然の出京以後としている。そうだとすると、童話の処女作「蜘蛛となめくぢと狸」等の作品が折角書かれながらそれきりで、

賢治と『赤い鳥』

大正十年までの二年半くらいは、全く童話は書かれなかったという、やや不自然なことになる。

それではその時期何を書いていたのかというと、制作月日が知り得るものでは、大正七年の日付を冒頭にもつ「盛岡停車場」、同じく大正八年の日付を冒頭にもち、翌大正九年（一九二〇年）の日付を稿の末尾にもつ「女」「猫」「うろこ雲」「ラジュウムの雁」などの「初期短篇綴等」にまとめられる小品と、大正八年と推定されている「手紙一」「手紙二」などである。

賢治の作品の場合、制作年月日はかなり几帳面に付されているものがあって、この「初期短篇綴等」や「春と修羅」の詩、それに短歌などはそれによって制作の日付を知ることができる。しかし童話については、『注文の多い料理店』所収の作品等ほんの一部を除いて、制作年月は付されていない。

賢治は大正七年に童話の処女作を書いて以来、大正十年に童話を量産するまで、随想風な「初期短篇」数編の制作推敲に明け暮れていたのだろうか。

2

一九一八（大正七）年早春、満二十一才の賢治は盛岡高等農林学校

本科の卒業を前に、進路について苦悩している。

二月一日(新校本全集書簡ナンバー(以下同じ)43 宮沢政次郎あて)、関教授より「土性の調査」参加の打診があったが、「差当り化学工業の方面に向ふには全く別方面」の事だとして、徴兵検査を延期する事と同様消極的である。そして「小生の只今の目算にては三月中は勉強四月に至りて学校の図書館に通ひて」「鉛製造工業」や「沃度製造或は海草灰の製造、或は木材乾留乃至は炭焼業」など小工業を目指すという意向を示している。

二月二日(44 宮沢政次郎あて)、「先づは自ら勉強して法華経の心をも悟り奉り働きて自らの衣食」を得て法華行者として生きられれば皆様に御恩返しができる。だから「先づ暫らく山中にても海辺にても乃至は市中にても小なる工場にても作り只専ら働きたく又勉強致したく」と繰り返し訴えている。

三月十五日盛岡高等学校本科卒業。

六月二十二日(72 宮沢政次郎あて)、土性調査の分析の仕事は苦しいわけではないが、無意味なことに心身を疲れさせられるのが嫌だ。しかし「分析も実地踏査も行はざるときには本も読み得」る。この仕事も来年の春までにはなんとかなりそうなので、「来年四月一杯」を自分の仕事の準備に当てたい。「地に関係ある則ち岩石、鉱物等を取り扱」いたいのだが、これらは多分に「山師的」だから職業にはしたくなく、だから「セメントの原料を掘りて売るとか石灰岩や石材を売る」とか、小規模の工場のできる精練のような仕事がしたいと、県内に産出の見込みのある土石を列挙している。

六月二十四日(73 宮沢政次郎あて)、質・古着という今の職業から「工業原料の売買」へ転職を勧めながら、その事業で一人前となつたら「東京へ参りて(十年や十五年後にても宜しく候)もう一返語学(それ迄には独逸話は卒業致すべく候)や数学を勉強致したく存じ候」と言っている。

七月一日(77 宮沢政次郎あて)、肋膜炎の心配が出て来て「今年一年は専心に分析と山の調査のみに従事し(中略)勉強は控へ」るとい、「到々私も弱みを生じ終り候 就れ来春よりは気仙沼あたりにても静なる仕事に従事」したいという。

九月二十七日(88 保阪嘉内あて)、「小生も事情さへ許すならば出京勉強」したいけれど今はだめで、「当地にて当分質屋療業の残務に手伝ふ積り」だという。

(十二月初め)(93 保阪嘉内あて)、宮沢家兄弟の通学が終わる大正九年までこの商売を続けておれば、後はなんとかなるが、今は自分の思うようにはできない。今は「古着の中に座り、朝から晩まで本をつかんでゐるか、利子やもうけ歩合の勘定をするかして」いる。

十二月十六日(95 保阪嘉内あて)、「アンデルゼンの物語を勉強しながら次の歌をうたひました。」として六首の短歌を書く。

十二月二十六日、妹トシが入院したという知らせで、看病のため賢治は母と上京し、そのまま東京で越年する。

十二月三十日(100 宮沢政次郎あて)、トシを看病しつつ、「兼て望み候通りの職業充分に見込」がついて見本も送るようにしたと報告。

一九一九(大正八)年

一月十三日(112 宮沢政次郎あて)、「本日初めて図書館に参り候。」  
一月十六日(114 宮沢政次郎あて)、「図書館には本日参り候へども之は只滞京中の副業に御座候間今日も二時には帰宿仕り決して勉強し過ぐる様の事は無之図書館に於ては主に必要事項の検索のみに止まり一心に勉強候様の事は先づ出来兼ね候。」

一月十八日(117 宮沢政次郎あて)、「私は毎日朝七時半乃至八時に病院に参り模様を聞き書信上げ候後上野の図書館にて三時頃迄書籍の検索読書等を致し夕方又病院に参り候」

一月二十一日(122 宮沢政次郎あて)、「前日の葉書に続けて「私は更に変りなく副業の図書館通ひも面白く運び居り候間御安心奉願候。」

一月二十七日(131) 宮沢政次郎あて、鉱物の「仕事を始めるには只今が最好期」だから「何卒私をこの儘当地に於て職業に従事する様御許可願ひ」たいと書く。

一月三十一日(135) 宮沢政次郎あて、としの退院間近を伝え、父ともに小田原への転地を勧め、その後早速仕事に掛かりたいと、その方法を具体的に記す。

二月二日(137) 宮沢政次郎あて、とし子の経過に次いで、自分の仕事について「仕事の綱目」を六つ、その用途をも記して「何卒一つしくぢらせる積りにて仕事に掛る様御許し下され度候」と懇願する。

二月五日(140) 宮沢政次郎あて、自分の計画に対する父の懸念について、「それ程迄稼ぐと云ふ事が心配なるものに御座候や。何卒私に落ちついてまじめに働くべき仕事を御命令被成下度候。(中略)又は私に自由に働く事を御許し下され候や。」と書く。

これが「蜘蛛となめくぢと狸」という初めての童話を書いたとされる大正七年八月の前後一年余りの、書簡によって知られる賢治の日常の記録である。盛岡高等農林学校の本科を卒業し、研究科に進み土性調査に携わったが、それは本意ではない。賢治の最も希望する職業は岩石や鉱物の売買や小規模でもそれら鉱物の加工工場の経営であつて、それは今が好機であるからと父にも質屋からの転業を促してもいる。その市場的な調査もするのだが、経営になれた父の厳しい目を、簡単に満足させ許可させるには至らない。その結果、それほどまでに稼ぐということに臆病なのか、私を自由に働かせると、候文の穏やかな言辞の裏にこめた、賢治の父に対する怒りや焦りがほとばしる。

確かに賢治のこの職業に対する熱意は真剣だったかもしれない。しかしこの書簡群を通覧していると、「勉強したい」「本を読みたい」という言葉が踊っていることも見逃せない。勉強といつても、それはその仕事に対する専門的な研究というものにもとれる。しかし、もう一遍語学や数学が勉強したい・事情が許せば出京勉強がしたい・アンデル

## 賢治と『赤い鳥』

ゼンの物語を勉強しながら・副業の図書館通いも面白くと続けると、よほど意になつた嬉々とした勉強以外には考えられなくなつてしまふ。それはアンデルセンの勉強というのではつきりする通り、文学の勉強を指しているのではないか。高等農林を出て父の手前まともな仕事を選らばなければならぬ。幼少から親しんできた岩石に関する職業をあれこれ考えてみるのだが、これとて父の快諾はえられない。そんな父が仕事として文学をすることなど理解するはずがない。生活の表面からは消えても決して根絶えることのなかつた文学への熱情、それがこの期間勉強というキーワードで押し殺された胸の波間を浮き上がつてきているのではないか。

宮沢賢治が、短歌に歌の別れをつけて、なぜ童話に移つたか。結果的には資質の問題だといえるが、きっかけになつたのは、大正七年七月に創刊された鈴木三重吉の雑誌『赤い鳥』ではなからうか。

賢治は何故『赤い鳥』に興味を抱いたか。勿論童話への関心はあつたろうが、『赤い鳥』を彼自身の作品の発表の場にしようとしたと推測できるのではあるまいか。

『赤い鳥』では第一号から「創作童謡童話募集」をしている。杜告の形で「これは直接購読者以外のお方からも広く募ります。(略)童話は鈴木三重吉が選抜して、優秀なもの両三編づつを紙上で推称します。十回以上推称された方は立派な作家として待遇します。(略)童話は二十字詰二百行以内、(略)」という内容である。

賢治が三月以来、自分の職業について父親と意見を交換していることは、先に見た通りである。賢治の頭の中に自分の職業の選択肢の一つとして、潜在的に作家があり、「十回以上推称された方は立派な作家として待遇」という方針がそれを刺激したであろうことはあながち否定できない。

しかし『赤い鳥』の創刊は大正七年七月。その六月には出ていたとしても八月に二十二枚の「蜘蛛となめくぢと狸」、三十三枚の「双子

の星」さらに四十枚の「貝の火」を書くのは並大抵のことではない。大正十年の一月三千枚という伝説からすれば軽いものだが、それはやはり伝説にすぎないであろう。

その『赤い鳥』創刊号の「通信」欄には「募集創作童話は、雑誌も未刊中でしたので、締切までに僅か二十八篇しかまわりませんでした。」とある。これによると『赤い鳥』の童話募集は、発行準備期間中にすでに公表されていた。応募した二十六人と同じように、賢治もその募集を知っていた可能性はある。

根本正義著『鈴木三重吉と「赤い鳥」』（鳩の森書房）には、三重吉が『赤い鳥』創刊を前に「各方面に配布」したプリント「童話と童謡を創作する最初の文学運動」が収録されている。（発行の年月日はない）。

その三点目で、「御賛成の方を五千名以上会員になっていただいて、発行を確実にしたいと思」うから、「御入会の方は三月上旬迄にお申込み下さいまし。」とある。そしてその五点目に「第一号の執筆者は次の通り」として項目と執筆者の一覧がある。創作童話の島崎藤村・徳田秋声・芥川龍之介・鈴木三重吉、創作童謡の泉鏡花・北原白秋は予告通りであるが、予告にあって創刊号にないもの（創作童話の野上弥生子、創作童謡の小川未明等）もある。その他、「懸賞創作童話小宮豊隆選」は、創刊号の「通信」欄には「募集創作童話」とあって鈴木三重吉選になり、目次には「推賞創作童話」として二作が掲載されている。これによればこのプリントが出された時点では、「会員が五千名近くに達しませば、直に印刷にかかります。」と編集が仕上がっているようにみせてはいるが、実際には本文の執筆者もあくまで予定であり、読者からの募集童話は、選者も含めて実際編集作業がなされる中で変わっていったと見られる。

ただし「雑誌は菊版八十頁前後の予定」というのは、創刊号八十頁とびったり符号するから割り付けがしっかりできていて、穴のあいた

ところは同量のもので埋められたのかもしれない。

さらに先の書は『赤い鳥』創刊号が刷り上がったのは「大正七年八月八日」という三重吉の小宮豊隆への手紙を紹介している。

これらから考えると募集原稿の締め切りは遅くとも会員締め切りと同じ三月上旬ということになる。

大正七年の二月三月の賢治は、稗貫郡の土性調査で研究員として残るかどうか、それに徴兵検査をどうするか、煩悶しながらその答を出し、ラッキョウをかじりながら卒業論文「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」に取り組んでいる時期にあたる。また放校された保阪嘉内に赤い経巻を送った時期でもある。

その多忙な二月三月から八月までの半年あまりのうちに「蜘蛛となめくぢと狸」「双子の星」「貝の火」は書かれたのだろう。

あるいは書きだしたら速い賢治だったから、七月の創刊号をみてから一ヵ月余でこの三篇を書くことも不可能ではなかったろう。

創刊号を飾っていたのは、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」鈴木三重吉の「大いたち」「ぶく／＼長々火の目小僧」徳田秋聲の「手づま使」などの童話であった。どれも十分に昔話的であった。賢治自身にしても幼少から、祖母キンの妹ヤソが語りだす昔話に馴染んでいたというのだから、童話といえど昔話の要素をもつ「蜘蛛となめくぢと狸」「双子の星」「貝の火」が、『赤い鳥』創刊号の掲載作品に做ってといっても、賢治が自然に編み出した方法でといっても、それほど変わらないことになる。

どちらにしても、『赤い鳥』のために書かれたこの三編は投稿されなかったようだ。そのどれもが募集規定の十枚に納まらなかったからだ。書けば書くほど長くなっていったのかもしれない。規定は「二十字詰二百行以内」、四千字つまり四百字詰原稿用紙なら十枚である。書いた三作はその二から四倍もある。

ただこの募集要項は次の八月号では、「創作童謡唱歌童話募集」に

なり、長さも「童話は二十字詰四百行以内」と二倍、原稿用紙二十枚に改定される。これならば「蜘蛛となめくぢと狸」などは条件に近くなる。

この三編は、いずれも主人公は勿論その他も人間以外のものので構成され、擬人化される昔話の描き方であった。それらは初期の『赤い鳥』の作品群の中に置かれればかならずや異彩を放つことが判っていた賢治は、ひよっとすると「募集童話」ではなくて、採用掲載されることを夢みていたのかもしれない。「蜘蛛となめくぢと狸」「貝の火」には総ルビがふつてある。創刊号の『赤い鳥』の作品はすべて総ルビだったからである。賢治はそんな自信をもって、八月家族の前で朗読したのかもしれない。

ところで『赤い鳥』発行の予告をプリントで知っていたら、どうして賢治は呼び掛けに応じて会員にならなかったのだろう。第三号の九月号から「賛助読者名簿」が載るのにその中に宮沢賢治の名はないようだ。会員になっても当然不思議はない。先に見たようにこの時期の賢治には公然と文学や童話に関わるのが父の手前遠慮されたのではないか。

あるいは仮に会員にならなかったら、「取置僅五百部しか」ないのだから、『赤い鳥』の本誌を手に入れることは難しかったといえる。あるいは後述の野口存弥の「創刊号は大正七年六月下旬に発売され、書店に並べられた。」のかどうか。会員にはなっていないくとも、何かで見ることは可能であったろうとしておく。

ところで、大正七年に賢治が童話を書き始めたことについて、その契機を雑誌『赤い鳥』の創刊に求めた考察は早くからあった。

恩田逸夫は「宮沢賢治の童話文学制作の基底」(『跡見学園国語科紀要』昭29・12・10)で「賢治は中央文壇と関係があったわけではないから、彼の童話制作開始の時期と赤い鳥の創刊とは偶然に軌を同じくしているにすぎぬかもしれない。しかし、賢治がそれ以前から外国の

## 賢治と『赤い鳥』

童話などに関心を持っていたことは考え得ることであるし、『赤い鳥』発刊によって創作意欲にまで高められたことは想像できるのである。賢治の童話多産の年が、大正十年の上京の時とされているが、この際には『赤い鳥』の運動は明らかに彼の注目するところとなっていたであろう。多かれ少なかれその影響下にあったことは想像にかたくない。(引用は原・小沢編『宮沢賢治論3童話研究他』東京書籍)といち早く指摘している。

また比較的新しいところで『日本古書通信』第766号(一九九三年五月号)には、野口存弥が「編集サイドからみた大正児童文学(7)宮沢賢治の童話」で「大正七年半ばに突然、自然発生的に書き始めたというようなことはあるはずがないとみなければならぬ。すでに触れたとおり、『赤い鳥』創刊号は大正七年六月下旬に発売され、書店に並べられた。恐らく賢治は創刊号を読み、とくに芥川龍之介の「蜘蛛の糸」から深い示唆を受けたのではないかと推定される。」と述べ、その「蜘蛛の糸」からの深い示唆について、「童話が外部世界を対象化するのに好適なジャンルであることを直感的に悟」り、童話への道が開かれたとしている。

他にも統橋達雄「賢治童話の成立をめぐる」(宮沢賢治研究『四次元』百号記念特集 一九五九・一)など、賢治の童話制作の動機と雑誌『赤い鳥』を関連づけた論稿はあって、これらに共通して言えることは、宮沢清六の記憶による賢治最初の童話「蜘蛛となめくぢと狸」などの成立が大正七年と、『赤い鳥』の刊行と軌を一にしている点である。

3

一九一九(大正八)年三月三日、賢治はトシに付き添って花巻に帰った。

四月十五日(143) 成瀬金太郎(あて)には、「私は暗い生活をしてゐます。うすくらがりのなかで遙に青空をのぞみ、飛びたちもがきかなしんでゐます。」と書き、これ以後鉱物の加工工場や新しい商売への意欲も消え東京移住の夢もなくして、暗い店番の苦悩を吐露することになる。

〔四月〕(144) 保阪嘉内(あて)にも、古着屋の店番を自嘲的に語って、「結局無茶苦茶です」と言い、「私のある友達が申しました。また私も申しました。『なるやうになれ。どうでもなるやうになれ。流れる。流れる。』ひとりでに流れる力は不可抗です。たゞしこれからの流れやうはきめなければならぬ。」と自暴自棄的である。

〔七月〕(152 a) 保阪嘉内(あて) (校本全集では157「秋」とされていたもの)には、「私はいまや無職、無宿、のならずもの、」と自「否定的言辭を狂ったように連ねたあと、「あゝ私のからだに最適なる労働を与へよ。この労働を求めて私は満二ヶ年 a から b、b から c、つかれはててやっぱりものとまゝです。もう求めません。商人は生存の資格がないと云ふものも出て来い、きさまは農業の学校を出て金を貸し、古着をうるのかと云ふ人もあるでせう。これより仕方ない。仕方ないのですから仕方がないのです。(略)』

〔八月二十日前後〕(154) 保阪嘉内(あて)

「私の父はちかごろ毎日申します。『きさまは世間のこの苦しい中で農林の学校を出ながら何のぞまだ。何か考へろ。みんなのためになれ。(中略) きさまはどうとう人生の第一義を忘れて邪道にふみ入ったな。』(中略) 私は邪道を行く。見よこの邪見者のすがた。学校でならったことはもう糞をくらへ。(中略)』

大正九(一九二〇)年

〔二月頃〕(159) 保阪嘉内(あて)

「古い布団綿、あかがついてひやりとする子供の着物、うすぐろい質物、凍ったのれん、青色のねたみ、乾燥な計算 その他。

これからさきのことは予定はしてありますがどう変わるやら。とにかく私にはとても私の家を支へ行く力がありませんので多分これは許して貰へるでせう。三十余年を私のために柄にもない商売の塵のなかに閉ぢこもりなほ私を開放しやうとする私の父に感謝いたします。」

五月二十日、盛岡高等農林学校研究生を修了し、助教授の推薦を辞退して、花巻に帰る。家業の手伝いのかたわらよく読書をしたという。(堀尾青史『年譜宮澤賢治伝』)

〔六月七月〕(165) 保阪嘉内(あて)「お互にしつかりやらなければなりません。突然ですが。私なんかこのごろは毎日ブリブリ憤ってばかりゐます。」

八月十四日(168) 保阪嘉内(あて)の手紙で、「来春は間違なくそちらへ出ます。事業だの、そんなことは私にはだめだ。宿直室でもさがしませう。まづい暮し様をするかもしれません。前の通りつき合せて下さい。今度は東京ではあなたの外には往來はしたくないと思ひます。真剣に勉強に出るのだから。」と書く。

大正十(一九二一)年

〔一月中旬〕(180) 保阪嘉内(あて) 上京直前の書簡には、「私の出来る様な仕事で何かお心当りがありませんか。学術的な出版物の校正とか云ふ様な事なら大変希望します (中略) 学校へは頼みたくないのです。勉強したいのです。偉くなる為ではありません。この外には私は役に立てないからです」とある。これを、前掲154、前年八月の手紙の「農林の学校を出ながら何のぞまだ。何か考へろ。みんなのためになれ。」という父の叱咤と並べ考えると、これは、岩石や鉱物などの学校の延長上にある職業にはきっぱり見切りをつけ、それ以外の勉強をしてみんなの役に立ちたいという意志の表明であり、表向きは「学術的な出版物の校正」と書いているが、「出版物」を本音と読んで文脈的に結び付ければ、ここには賢治の文学・著作を職業とすることへの覚悟が表明されていると読めるのである。

大正八年三月から大正十年の上京前までの賢治の暮らしと心境は、主に家業の店番に閉じ込められて、悩み悲観し憤る状況にあった。そのなかでこの二年間模索してきた家業を継ぐことや事業を興すことはきっぱり断念し、どう変わるかもわからないが、将来の計画はつかんだように見える。大正九年の夏以降、勉強のための上京をほめかすころから、その文面に活気がみられるようになる。

この期間賢治は何を書いていたのか。制作年月のはっきりしたものは先にも述べた「初期短篇綴」の「猫」「ラジュウムの雁」「女」「うろこ雲」などを大正八年から一年がかりで完成し、大正八年より以前に書いた「家長制度」「秋田街道」「沼森」「柳沢」なども大正九年に推敲完成している。それから「手紙一〜三」が大正八年の後半に書かれているようだ。

ほぼ二年間でそれだけであったとはとても思えない。またそれだけであつたら職業としての文学・著作への道が選択されるわけもない。この時期に、「蜘蛛となめくぢと狸」に続けて、かなりの童話が書かれたのではないか。

制作年月が不明な童話作品は沢山ある。それらのおよその制作年代は、使用された原稿用紙や筆記具などによって分類され、推定されている。校本全集（新校本全集）の目次、作品の配列はその研究の成果の上に立っているようだ。

ここでごく初期に書かれたと推定される作品、つまり新校本全集第八巻（童話Ⅰ）に掲載された全作品について、その順に作品名とその枚数を新校本全集の校異篇によって列挙してみる。枚数が空白なのは原稿用紙の裏面に書かれているため一応除外しているものである。

〔10 20（イ）イーグル印原稿用紙（藍色野）〕略称・イ

題名下の（ ）内の（初）は初期形、数字は四百字詰原稿用紙枚数

〔蜘蛛となめくぢと狸〕（22）

〔双子の星〕（33）

賢治と『赤い鳥』

〔貝の火〕（40）

〔ひのきとひなげし（初）〕（11）

〔いてふの実〕（7）

〔畑のへり（初）〕（7）

〔月夜のけだもの（初）〕（13）

〔1020イーグル印原稿用紙（草色野）〕略称・草

〔よだかの星〕（14）

〔さるのこしかけ〕（11）

〔種山ヶ原〕（26）

〔めくらぶどうと虹〕（7）

〔気の良い火山弾〕（12）

〔青木大学の野宿〕（草8＋広＋印29＋欠落分枚）

〔馬の頭巾〕（9＋欠落分枚）

〔山男の四月（初）〕（11＋欠落分一・二枚）

〔かしはばやしの夜（初）〕13＋欠落分枚）

〔ツェ〕ねずみ（13）

〔鳥箱先生とフウねずみ〕（10）

〔10 20（広）イーグル印原稿用紙（藍色野）〕略称・広

〔クンねずみ〕（15）

〔けだもの運動会〕（ ）

〔十力の金剛石〕（24）

〔連れて行かれたダアリヤ〕（連れて行かれたダアリヤ初）（ ）

〔若い研師〕（5＋欠落分枚）

〔若い木霊〕

〔研師と園丁〕

〔カイロ団長〕（24）

〔蛙の消滅〕（19）

〔連れて行かれたダアリヤ〕（11）

「葡萄酒(初)」(9)

「とっこべとら子」(11)

「10 20(印) イーグル印原稿用紙」(藍色野) 〓略称・印

「よく利く葉とえらい葉」(広+印12)

「十月の末」(広+印16)

「ひかりの素足」(広+印など46)

「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」(印+広66+十数枚)

未発表原稿で成立年代の不明な作品を、使用された原稿用紙や筆記具などから推定した成立年を、『別冊国文学・NO.6宮沢賢治必携』(佐藤泰正・編学燈社'80春季号)によって調べてみると、原稿用紙の略称・イと略称・草に書かれたものは、大正十年頃に成立かというものが多し。略称・広を使用した作品と、略称・広に略称・印を併せ使った作品は、大正十あるいは大正十一に成立と、少し遅らせて推定されているようだ。

ここに列挙した作品は、すべて「蜘蛛となめくちと狸」「双子の星」などごく初期の作品といわれるものも含めて、現存草稿は大正十年またはそれ以降とされている。つまり現存草稿で大正九年以前のもものは存在しないということになる。「蜘蛛となめくちと狸」なども、家人の前で朗読されたのは大正七年としても、現在ある草稿は大正十年頃のものだという意味である。

現存草稿の成立した大正十年をそのままその作品の成立と理解すると、上京後に一カ月三千枚書いたという伝説が生まれざるをえないことになる。

大正十年までに書かれたという確実な証拠のある作品は見つからないけれども、大正九年の夏頃より、沈みきっていた賢治が何かつかんだように上京への意欲をたぎらせたのは、単に気持ちの切り替えだけが理由ではなかったのではないか。

新校本全集八巻の、童話作品で最も早く書かれたと目される作品群

を眺めてみると、原稿用紙十枚前後の作品が目立つ。「蜘蛛となめくちと狸」など冒頭の三作品は長く、賢治が拘束なく自然に書く長さがこれくらいらしいのに、それに続く作品は、例外はあるにしても非常に短いものが並ぶ。

そしてまたこれらに続く新校本全集九巻に並ぶのは、「風野又三郎」「三人兄弟の医者」と北守将軍「猫の事務所(初期形)」「毒蛾」「フランドン農学校の豚(初期形)」と長いものが続く。

この十枚から二十枚の短い作品は、『赤い鳥』の「募集創作童話」に応募するために、その規定に合わせたものではなかったか。

二十枚以下に抑えて書き、きわめて早い時期に書かれたとされる「ひのきとひなげし(初)」「いてふの実」「畑のへり(初)」「月夜のけだもの(初)」そして「かしはばやし(初)」「煙のへり(初)」「月夜のけだもの(初)」にほぼ全編にルビが施されている。それらに続く時期に書かれた比較的長い「種山ヶ原」「青木大学士の野宿」「山男の四月(初)」の三編は最初から途中までルビが打っており、同じ原稿用紙(略称・草)に書かれた「よだかの星」「さるのこしかけ」「めくらぶだうと虹」「気のいい火山弾」「馬の頭巾」にはルビがないし、第八巻の「ツェ」ねずみ」以下の十七編にもルビはない。ルビのないのは第九巻に及んでいる。

ルビが施された作品は、おおまかにいって、第八巻にある、きわめて早い時期に書かれた、短い作品ということが出来る。また特に「初期形」とされるもの(手入れ後も題名が変わらないもの)には、六編のうち少し時期が遅い「葡萄酒」を除く五編にルビが打たれている。

賢治の作品のうちルビが施してあるのは(賢治自身が施したのではないかもしれないものを含めて)、発表された作品、童話集「注文の多い料理店」の中の九編、雑誌『愛国婦人』の「雪渡り」、『岩手毎日新聞』の「やまなし」「氷河鼠の毛皮」「シグナルとシグナレス」などであるから、第八巻の作品のルビを施されたものは、発表を予定していたという推量は可能である。

大正十年を待たずに賢治が童話を書き出していった、あるいは大正七年には童話の試作が始まっていたのではないかとという推量の根拠をも一つ挙げたい。

『赤い鳥』第一号の巻末の「通信」のページ（七六頁）の三段目に次のような記事がある。

日本山岳会の近藤幹事さんのところへ、越中立山の登山案内者からこんなハガキがまわりました。「ハイケノボレバ、春ノハナミガ、ウチクスイデシヨ。ゴカナイサマ、ミセノ人サマハ、ミンナブジデゴザイマスカ。ワタクシノホモブジデシ。ハナハタモシカネ候ヘドモ、ワタクシノトシヨリハ、ミカワノ国ヨリ、東京ヘケブチニデルカモシレンデ、ソノトキ、ヲジヤマヲシマシ。ヤクヒトバン、トマリモライシヨ。ヨロシクタノミマシ。越中立山芦□寺町、佐伯平蔵。」（山岳会員某）

『注文の多い料理店』の巻頭童話「どんぐりと山猫」の書き出しの部分。「おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。かねた一郎さま 九月十九日／あなたは、ごきげんよろしいほで、けつこです／あした、めんどなさいばんしますから、おいで／んなさい。とびどぐもたないでください。山ねこ 拝」

を比較してみると、全体に感じがよく似ているのだが、その共通点を次のようにまとめていいだろうか。

- ①「ウチクスイデシヨ」と「とびどぐもたないでください」などに見られる幼児語的言い回し
- ②「ワタクシノホモブジデシ。」と「ごきげんよろしいほで」の「は」の共通的な使い方
- ③「ハナハタモシカネ候ヘドモ」と「けつこです」などにみられる「う」の表記の省略
- ④たどたどしい敬語。

## 賢治と『赤い鳥』

⑤どちらも葉書であること

「どんぐりと山猫」は「一九二一・九・一九」つまり大正十年の日付をもつ。実際賢治が創刊号をみたとしても、そのエピソードを使ったのは三年後ということになる。そんな片隅のちょっとした記事を三年間あたためていたとも考えられるが、普通一つのエピソードに触発されて、それが作品に成るまでどれくらい時間を要するのか。

対馬美香『宮沢賢治新聞を読む 社会へのまなざしと、その文学』（築地書館）の「三章 ノンフィクションからフィクションへ」社会事件をもとにした童話と短編」が、賢治作品三編について、作品とそのきっかけとなった新聞記事についての関係を詳述している。

それによれば、「毒蛾」の場合は、「草稿に創作年月日は記されていませんが、その内容から、同事態の発生後、数日を経ないものと推定されます。」とある。

「税務署長の冒険」は、密造酒事件が何度も起こったためか、また何年にもわたったためか記事の特定ができないため（新聞記事で紹介されているのは大正十一年と十四年）に、作品との直接的な関係は語られていない。

もう一つ「疑獄元凶」で、モデルとなった疑獄事件の判決が「時事新報」に報じられたのは「一九三三（昭和八）年五月十七日（十六日夕刊）」で、その報道をもとに賢治が「物もいわずに万年筆で」即座に書いたという、森荘巳池の回想は否定して、「疑獄元凶」の執筆時期は、『校本宮沢賢治全集』が示した「昭和八年七月から九月上旬」というのが最も妥当のように思われます。」としている。これに従えば、賢治が新聞記事を見て執筆するまでの時間は二、四か月となる。

普通に考えて、作家がある事柄に触発されて作品を成す場合、あるいはそれを作品に採り入れる場合、ここに見るように極めて短い時間の内であることは納得できるから、「どんぐりと山猫」の場合も、『赤い鳥』創刊号の投書を見てインスピレーションを得たとすれば、それ

## 賢治と『赤い鳥』

とそう遠くない時期つまり大正七・八年には書かれたのであろうという推測は成り立つ。しかしこの初期形は失われたか、あるいはそのまま推敲されて「(一九二・九・一九)」に完成したかどちらかであろう。

これら『赤い鳥』の「募集創作童話」のために書かれたであろう短い童話群は、実際投稿されたのだろうか。

投稿されたとみる。

だが結果として一編も採用されなかった。これだけの作品が全く選者鈴木三重吉の目に止まらなかったのは不思議といえは不思議である。それではどんな作品が採用され掲載されたのか。

この「創作童話募集」欄に推称されて掲載された作品名と、併せてその号の「通信」欄で、三重吉が筆を執った選者評を、特に投稿者全体に当てたものを中心にみることにする。

4

大正七(一九一八)年

創刊号には、「おせっかい」(約六枚 昔話風)と「小さな兵隊さん」(約四枚 生活童話風)の二編が載る。

終わりの「通信」欄に、全体に対する寸評として、「今度選に漏れたものについて」「いづれも、第一に言葉の選択が粗雑です。たゞ、子供にわかる言葉を使ったのみで、その上に、言葉の品位と、色調とに一寸も注意が払ってありません。それからものゝ言ひ表し方が、下卑てゐたり、感情が誇張されてゐたり、無理に強ひた教訓が鼻につくものが多」い。「特に一ばん厭だつたのは、下手な文章で、やたらに装飾をつけて、一人でよがってゐるといふやうな或一二の人の、書方」だった。「童話に限らずすべて、文章は、言ひ現し方に飾りをつけるのは下等です。たゞ、あたりまへの言葉を使ってそれが伝へる感情、

感覺、理性が、全体のフレボア(香味)と、深さとなるやうな、さういふ意味の飾りでなければ取り柄にはなりません。」(『赤い鳥』第一巻第一号 通信 七七頁)と述べている。

八月号に「ねんくねむの木」(約六枚 昔話風)

九月号に「小さなお馬」(約八枚 昔話風)

十月号に「黄金の卵」一(約九枚 昔話風)

十一月号に「金の牛」(約九枚 昔話風)

十二月号には「鼠のお餅」(約五枚 昔話風)と、投稿者にあてて、「童話は相変らずいゝ作がちつとも集りません。(略)集つた中にはごとくと飾りを入れたキザな書方をしたのがずるぶんあります。たゞ普通の口語で、当りまへに話の筋を書いたらどうでせう。(略)私は童話といへどあなたがち在来の所謂お伽噺や作り物語のやうな為組みのあるものゝみを得たいといふではありません。たとへば、子供のちき目の前に並んでゐるものについて、軽く笑ひ楽しむやうな平面的な記事でもかまひませんから、ともかく、もつとわれわれや子供たちの直接な感情に触れるやうな、活きくしたものを書いて見て下さいませんか。」(第一巻第六号 12月号 通信 七九頁)と書く。

大正八(一九一九)年

一月号 なし

二月号(特別号) なし

三月号「鼯と鼠」(約六枚 昔話風)

全体評は、「私は、書き方は少々下手でも、全き意味での創造で且つ製作の態度の純なものを選びますから、どうか構想がお整ひになつたら、それを日常の口語で、人に話すとほりに虚飾なく書いて戴きたいものです。そのためには、多くの方は先づ試に、毎号入選の少年少女諸君の綴方をお読みになつて、私の推奨してゐる、あの純真な簡朴な表現の魅力に惚いて下さることを切望いたします。」(第二巻第三号 三月号 通信 七九頁)

四月号なし

全体へのメッセージはあって、「応募創作童話 今回は四十一篇中から僅かに左記の六篇を予選し得たに過ぎません。いつまでも、よい作が容易に集りません。(中略) いまだにグリムなどを焼直してよこす方がありますが、これでは単に私が下読みをするだけでも本当に徒勞です」(第一巻第四号 四月号 通信 七九頁)

五月号なし

六月号「桜の花」(〈前半分〉約七枚 生活童話風) が採られ、それについての評が載る。「これ(筆者注)入選創作童話「桜の花」館内伊佐美作) は行数が少し超過してゐましたが今度だけは通過させておきました。紙面に制限がありますから、すべて長いものは困ります。

(略) 原文の表現には私が常に排斥してゐる種類の厭味が一寸もありませんでした。たゞ蕃地に接近した特殊の村落の空氣があまり出でないのが物足りません。もし、空想の作でないならば、もう少しの工夫で、所要の地方色をもつと出せる筈だと思ひます。話は筋のみを追ふ人には少し呆気ないかも知れませんが、余計な細工がしてないので、それだけ現実味が保持されていかにも本当にあつた出来ごととのやうに自然に受取れます。私はこの眞実感を第一に取りました。作者が狙つた、少年時代の、単なる好奇心以上に、まだ見ない或物を憧憬する一種の心持は十分同情し得られます。これが、前に述べたやうに、より濃密な特殊の地方的空氣の中に点出されたならば、その異國的な興味によつて、もつと寂しい哀れな感情が加はるところでした。(略)」

(第一巻第六号 六月号 七九頁)

七月号「桜の花」(〈後半分〉約五枚 全体約十二枚)

この「桜の花」は六・七月に分けて掲載され、長さは六月号が六枚と少し七月号が五枚と少し。両方で四百字詰原稿用紙十二枚くらい。次のような内容である。

四郎は、父親の關係で台湾の山の中の村に住んでいる。日本からの

繪葉書にある桜の花を見たさに、危険だとされる山奥の村へ蕃人の子と行こうとする。ところがそれは四郎には到底無理な企てで、途中で蕃人の子もいなくなつてしまひ、泣いてゐるところを、偶然知り合ひの蕃人に助けられて、やつとの思いで、四郎の失踪で大騒ぎしている村に帰ってくる。蕃人の子は行方知らずになつた、というものだ。

八月号・九月号なし

十月号「銀の小函」(約六枚 生活童話風) 最後の頁に「緊急社告」のあと通常の原稿募集要項の形で、「創作童話募集(略) 再話翻案等は一切取りません。必ずしも在來のお伽話風の架空な作りものに限らず、寧ろ子供に関する日常の事實、子供の心理を描いた現実的な話材を歓迎します。一行二十字詰。四百行以内。」という記事。(第三巻第四号 10月号 八〇頁)

十一月号・十二月号、なし

大正九(一九二〇)年

一月号なし

二月号「奈々ちゃん」(約六枚 生活童話風)。この作品に関して「今後ともお互に、子供の生活を、単に比較的外面的にでなくもつと或根底に突き入つて考察することに努力したい」と述べる。

三月号「櫃の木」(約八枚 生活童話風)

四月号「窓」(約五枚 生活童話風) と関連して、「すべて教訓なり諷刺皮肉なりは、十が十、それを表立つて注解しないでも、単に事實そのものだけが十分有力にそれを示説するのが寧ろ最普通です。(略)」と述べる。

五月号「紙糰さま」(約九枚 生活童話風)

六月号から十一月号まで、なし

十二月号「桜の枝」(約十二枚 生活童話風)

大正十(一九二一)年

一月号なし

賢治と『赤い鳥』

二月号「友だち」(約十枚 生活童話風)  
三月号・四月号なし

五月号「信ちゃん之死」(約十三枚 生活童話風)。その作者について「多くの応募者に比べると、吉田さんは一人際立つて光つてゐます。原作でも、十分あつた、いろ／＼の場合の空気がかなりよく写せてゐました。作として、深いものではない代りに、全体が一種の気分ですっきりと纏つてゐます。」といい、「毎回二三篇は、主題だけでは一寸面白いものをよこす人もありますが、話に気分や空気の出てるものは殆ありません。これでは単なる事実や問題の提出といふのみで芸術品にはなりにくいです。」という。

六月号から九月号まで、なし。八月号から十月号までの三回「童話劇脚本懸賞募集—日本で始めての試み—」の募集の趣旨が掲載される。

十月号「落書」(約十六枚 生活童話風)。それについて「所謂事実的描写—表現上に寸分の飾りをつけないで、事実をそのまま記録するといふかきかた—さういふ点で、いかにも無駄のない、引きしまつた作品」と褒める一方、「作全体の上に、潤ひといふものがひどく欠けてゐるのは、作者の性格によることだ。また作者は「言葉そのものに対する感覚から、かなり鈍いやう」だから、「事実の確実な把握と共にもう少し選ばれた言葉を以ての表現に努力しないと」いけない、と書く。他の予選通過作については「読んで行くうちに、こゝを削りたい、こゝをかう直したいといふ意味で、じれつたいところが随所に」あると手厳しい。

十一月号・十二月号なし  
大正十一(一九二二)年

一月号・二月号なし。一月号に「童話劇脚本懸賞募集」の入選者が発表されている。

三月号「常ちゃん」(約十一枚 生活童話風)  
四月号から十月号まで、なし

十一月号「答案」(約七枚 生活童話風)  
十二月号なし

大正十二(一九二三)年  
一月号から十一月号までなし。

募集状況などの記事もない。ただし十月号と十二月号は関東大震災のため休刊、十一月号は十月号の繰り延べ号。

募集創作童話は、創刊された大正七年は、七月創刊号から十二月号まですべて採用掲載された。大正八年は三、六、七、十月の四回(六・七月は同じ作品の正統)だけ。大正九年は五回、大正十年は三回、大正十一年は二回、大正十二年は関東大震災のため十一回の発行だが、ついに一つも掲載されたものが無かつた。

入選した童話群を概観すると、日本風あるいは西洋風の昔話か、当時の子ども達の生活に材をとつた生活童話的なものがほとんどである。

それは鈴木三重吉の応募創作童話の採用基準がそうであつたからだが、『赤い鳥』に載っている作家の創作作品も一部例外はあるにしても大体同じ趣向のものであつたといえる。

賢治がこの創作童話に応募してゐたとするなら、賢治もまたその方針に無関心ではありえない。鈴木三重吉が童話の応募者に期待したことは何であつたかを、「通信」欄の作品評を中心にまとめてみる。

1 文章については、飾りの多い文章はよくない。普通の口語で当りまゝに書くことを、繰り返して主張している。

方言は、「綴方選評」(第七卷第三号)では、子どもの綴方での使用は「生き／＼と躍動」感がでるからよいとしてゐる。

2 内容については、お伽噺や作り物語のような為組みのあるものだけでなく、子どもの平凡な日常生活を題材にして、子どもの生き生きとした感情や心理を描いたものを望むとしてゐる。再話や翻案等は一切採用しない。

少々下手でも独創的で制作態度の純粹なものをよしとしている。実際に採用された作品は、昔話風のもの、創刊後一年足らずは主流を占めるが、それ以降は影をひそめ生活童話風のものばかりになり、選者の趣旨は徹底してゆく。

3長さについて、紙面の都合上、すべて長いものはだめという。しかし長いのが指摘された「桜の花」もせいぜい十二枚くらいで、規定内である。大正九年まではほとんどが推定十枚以下で、それ以降は十枚を少し超えるようになる。

なかなかいい作品が集まらないといい、童話の創作は難しいと、選者を嘆かせながら、この応募創作童話には毎月沢山の応募があった。初めのうちは割に几帳面に応募数や予選通過数が掲載されたが、入選者が少なく掲載が見送られることが多くなる大正八年の後半から大正九年にかけては、全く報告がなかったり、何ヶ月もまとめられなかったり、選者の意気込みが薄れていっているように見てとれる。

多い月は二百を超える応募がありながら入選作は減ってゆく。よほど水準が高く設定されているのかという、入選作を今読んでみると文章と内容といふそれほど傑出してゐるわけでもない。もし賢治が先ほどみた童話を応募していたとするのなら、それはどの入選作より独創的で優れたものであるはずなのに、なぜ選ばれなかったのか。

一つは採用の傾向が、昔話的なものから、生活童話・学校童話的なものに移っていったが、賢治の書いたものの主流は、切り口の新しい昔話風・架空の作り話であったこと。また賢治も採用の傾向を知って子どもの生活をえがいた「種山ケ原」や「十月の末」などを書いたが、それらは、採用された都会の少年少女小説的な生活童話とはまるで異なつた、詩に満ちた農山村のスケッチであつたこと。

二つめは賢治の表現は、三重吉が推奨する少年少女の綴方のような純真簡朴な表現とは逆に、三重吉が排して止まない装飾の多い誇張的な表現であつたこと。

三つめは長さは四百字詰め二十枚と規定しながら、実際採用されたものは十枚以下の短い作文風のものが多かつた中で、賢治のものは規定内であっても長く、三重吉は紙面の都合上とはいつても長いものを採らなかつたこと。

しかしそれらは現在の評価の上に立つ宮沢賢治と、今はもう消え去つて跡形もないものとの比較で言えることかもしれない。仮に本当に三重吉が賢治の投稿作品を読んでいたとしたら、賢治の実力を認め得なかつたことは信じがたいことだと思わざるをえない。

一方賢治は自分の作品の実力を信じ得たと思う。応募入選作の水準はおろか、『赤い鳥』が誇る当代第一流の作家や詩人の童話より優れたものであることを確信していたにちがいない。それは大正十年一月の上京後すぐアルバイト先の文信社で知り合った鈴木東民が「筆耕のころの賢治」で語つた「もしこれ（筆者注）風呂敷包みにいれて賢治が持つていた童話の原稿）が出版されたら、いまの日本の文壇を驚倒させるに十分なのだ、残念なことには自分の原稿を引きうけてくれる出版業者がない。必ずその時が来るのを信じている（以下略）」（山内修編著『年表作家読本 宮沢賢治』河出書房新社）ことでも察しがつく。

賢治はもはや投稿という形ではことが進まないことに気づいていた。投稿不採用になつた原稿、さらにこの二年間に書き溜めた原稿をながめながら、もはや鈴木三重吉の真意を直接ただすしかないと思ひ始めていたのではないか。驕り高ぶつた気持ちからはなかつたらう。自分がやつと見つけた職業が成るか成らぬか、それを知りたいせつぱまった気持ちであつたらう。

上京しなければならぬ、そう思い至つたのではないか。  
引用は『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房）による。

（本学教授）